

「恐竜だって、 本当は鳥みたいになりたい」



講師： 川上 和人
森林総合研究所主任研究員

恐竜は絶滅しておらず、実は生き残っていた、という話題がしばしば聞かれる。無論、ネッシーのことである。

ただし、気を付けてほしい。ネッシーは首長竜の仲間だ。首長竜は、恐竜と同じ年代に生息した大型爬虫類だが、恐竜とは別グループである。池田湖のイッシー、屈斜路湖のクッシーも同様だ。

それはさておき、学術の世界でも、やはり恐竜は絶滅していないという説が有力である。多くの研究者が、鳥類は恐竜の子孫だと考えるようになったのだ。つまり、恐竜は鳥類として生き残ったのだ。最近では、羽毛の生えた恐竜も多数見つかっている。

恐竜研究の弱点は、研究対象が遠い過去に絶滅していることにある。残されたのは、骨や卵、足跡などの化石のみだ。その他の部分については、不明点が多いのが現実である。

一方、恐竜図鑑に描かれる姿は、骨ではない。ティラノサウルスは、マッチョな筋肉をまとい、渾身の迫力姿勢で威嚇してくる。しかし、軟部組織も行動も、化石には残りにくいため、その姿は大部分が想像だ。実際には、垂れ目にグルグルほっぺで、冗談ばかり言っていたかもしれないのだ。

そんな中、鳥類が恐竜の子孫であることがわかり、恐竜研究に新たな光明が射した。鳥類は、直接観察が可能な恐竜なのだ。そこで、恐竜の復元のため、古生物学者により鳥類が研究されるようになってきた。

いまや、恐竜は飛ばない鳥類、鳥類は飛ぶ恐竜である。鳥類学の知見は、太古の恐竜の生活を推定する、重要なツールになるのだ。

そこで今回は、鳥類の知見に基づいて、若干根拠のある恐竜復元を試みたい。ただし、高度に学術的な話題を期待してはいけない。私はあくまでも鳥類学者であり、恐竜学者ではない。よって、プロとマニアはお断りだ。

幸いにも、野生の恐竜を見た者はいない。復元結果の真偽は、検証不能だ。ただし、遠くない将来、ドラえもんと共にタイムマシンが開発されると、無責任なことが言えなくなってしまう。今のうちに、鳥と恐竜を、一緒に楽しもうではないか！

★講師プロフィール

主任だが部下はいない。

鳥類保全と、外来生物管理の研究が本務。

著書：「鳥類学者無謀にも恐竜を語る」（技術評論社）、「外来鳥ハンドブック」（文一総合出版）他。

日時：平成26年11月1日（土） 14時30分～16時00分

場所：アビスタ（我孫子市生涯学習センター）ホール

主催：我孫子市鳥の博物館・（公財）山階鳥類研究所